

海外研修による英語情意要因の変化： 国際ボランティア活動の場合

Using English in a Study Abroad Program: Participants in International Volunteer Projects

YASHIMA, Tomoko

Kansai University

Abstract

This paper investigates the effects of study abroad on English learners' affect through using English. The participants of the study are 265 college students who joined in international volunteer work projects and a control group of 109 students who did not participate in the projects. In pretests it was revealed that those who had previous experience of study abroad showed a significantly lower level of anxiety, higher level of willingness to communicate (WTC), and were higher in a parameter named "Having things to communicate" than those who never had such an experience. In addition, as participants of the project and non-participants were different in all of the parameters already prior to participation in the project, ANCOVA was employed to assess the changes that occurred through the project. The results showed that participants of the project gained in WTC and felt that they had more to communicate than non-participants. Further, through ANOVA, participants of the project were shown to substantially lower their L2 use anxiety. The implications of the findings on English education and the significance of study abroad experience are discussed.

Key Words: Study abroad, Willingness to communicate, English use anxiety

1. はじめに

グローバル化する世界において、若者の国際交流は世界的な潮流となっている。日本でもホームステイなどで英語学習を目的に海外に出る若者の数、いわゆるスタディ・アブロードの参加者は増加の一途をたどっている。そういうなかで海外語学研修などの成果として、「英語を話す不安が取れた」「話す事に抵抗がなくなった」「積極的になった」など情意的な側面をあげる学習者は多い。スタディ・アブロードによる言語習得についてはある程度研究が蓄積されているが、その他の側面、学習動機や言語使用不安、英語を使うことへの積極性がどのように変わるかという点については、あまり研究が行われていないのが現状である。

一方、最近の大学生のスタディ・アブロードの特徴として、いわゆるホームステイに飽きたらず、国際的協働やインターンシップなど、仕事が絡んだプロジェクトへの参加を目指す傾向が見られる。こういったプロジェクトでは、滞在先の言語文化の学習者としてホストから学ぶ「生徒」の立場に安住できるホームステイと異なり、他国からの参加者と対

等に議論をし、プロジェクトを運営していくことが求められる。すなわち英語を用いて積極的にコミュニケーションを行うことがより必要となる状況といえる。ここでは、不安や恥ずかしさなどの感情を抑制し、主体的に言語使用することが必要となる。このような状況をふまえ、国際ボランティア・プロジェクトに参加した大学生を対象に、その経験を通して英語使用の情意的側面(英語使用の積極性や不安)がどのように変化するかを調査する。また、このプロジェクトに参加する約半数の学生がすでに以前にホームステイを経験していることから、繰り返しスタディ・アブロードに参加することの影響も合わせて分析する。

これまで同じ国際ボランティア・プログラムの参加者を対象に、帰国後に半構造化面接を用いて行った調査では、日本人学生の参加のスタイルがやや周辺的であることがわかっている(Yashima, 2009b)。肉体労働の多い作業には熱心に取り組む一方、「議論になると蚊帳の外」「日本人は意見をもっていないと思った」などという参加者の語りが示すように、多くの参加者が議論や集団としての意思決定に関わることの難しさを報告していた。なかには、それを低い英語力のせいだと考える学生もいた。こういった状況をふまえ、本研究では、自らの英語力をどう認知するか、また英語で伝えたいことがあるのか、ということが、英語を使うときの不安や英語でコミュニケーションを図ろうとする傾向にどのように関係するかについても調査する。

2. 先行研究

2.1 スタディ・アブロードの効果

スタディ・アブロードの第二言語習得への効果を扱った研究は欧米の研究者によるものが中心である。多くの研究を収録した Collentine and Freed (2004) の編著によると、全体として言えるのは、語彙や文法の発達においては、スタディ・アブロードが必ずしも自国の教室での学習に勝るものではないものの、コミュニケーションに関連した要素については、その効果がより明確であるということである。例えば、ナレーティブの構成能力や意味的濃度の濃さ (semantic density, Collentine, 2004)、コミュニケーション・ストラテジーの使用、(Lafford, 1995; 2004)、流暢さの獲得 (Freed, 1995; Freed et al., 2004; Segalowitz & Freed, 2004, Yashima & Viswat, 1997) などにおいては、スタディ・アブロードの効果はかなり明確に示されている。また最近の研究では、リーディング (Dewey, 2004)、ライティング (Sasaki, 2004, 2007) などの個別技能面に関するスタディ・アブロードの効果の報告も行われている。

一方情意的側面については、1970 年から 80 年代に、カナダの研究者が短期的な異文化接触が目標言語話者への態度や学習意欲に良い影響があったことを報告しているが (Clément et al., 1977; Desrochers & Gardner, 1981; Gardner, 1985)、系統だった調査は少ない。Dufon and Churchill (2006) は、最近におこなわれた 3 点の論文を引用し、スタディ・アブロードの学習動機への影響の調査は結果にはばらつきがあることを指摘している。日本では酒井・小池 (2008) が自己決定論の枠組みを用いて、国内で行われた国際イベントへの参加が英語学習の動機を高めるうえで良い影響があったことを報告している。また、Sasaki (2004; 2007) は長期的な調査にもとづき、スタディ・アブロードに参加した学生は参加しなかった学生と比べて、伝える相手が明確になることから、「英語を書く動機」が高まることを見出している。このように動機づけについては、多少とも研究が見られるものの、不安などの情意要因の変化については、研究がほとんど行われていない。本論では、特に不安と英語を話す意思を中心にその関連要因を扱う。

2.2 外国語使用不安

外国語を使うときに感じる不安についての研究は、主に教室における学習の側面への影響を中心に研究が行われてきた。特によく見られるのが、不安尺度を用いて、不安と言語学習との関係を調べるといふ枠組みで行われたもので、言語学習の成果と不安の高さの間に負の相関を見出している (e.g., Horwitz, 2001; MacIntyre, 1999; MacIntyre & Gardner, 1994)。一方、教室外での不安と異文化接触を扱った研究では Clément (1986) が、不安が高い人は異文化接触を避ける傾向があることを報告している。

2.3 第二言語で自発的にコミュニケーションを図る意思 (Willingness to communicate)

「第二言語で自発的にコミュニケーションを図る意思 (willingness to communicate in L2)」(これ以後 WTC) については MacIntyre, Clément, Dörnyei, & Noels (1998) が第二言語習得に関係する概念として提案して以来、「話すこと」が中心であるが4技能を含む、研究者の注目を集めてきた。日本においても英語を使う積極性と学習意欲や英語力など関連要因の調査がおこなわれている (Yashima, 2002; Yashima, Zenuk-Nishide, & Shimizu, 2004)。コミュニケーションは英語学習の目的であると同時に手段であることから、コミュニケーションを積極的に行わないと、伝達目的が達成されないだけでなく、英語の習得が停滞する可能性がある (Yashima et al., 2004)。Yashima の調査では、英語を使うことに対する不安が低いほど、また自信があるほど WTC は高いこと、また国際的志向性 (2.4 を参照) が高いほど WTC が高いことを報告している。

2.4 国際的志向性 —— 世界の人々に何を伝えるのか？

第二言語の学習動機づけ研究において、「統合的態度 (integrativeness, Gardner, 1985)」は古くから学習意欲を説明する態度として使われてきた。これは、目標言語文化への興味や目標言語話者への接近意欲 (例：日系ブラジル人と友達になりたい) を指し、この態度をもつことが実際に言語の習熟度に影響することを実証的に示した研究も多い。一方日本において英語の学習動機を考える時に、その国際語としての位置づけから、特定の文化 (例えばアメリカ文化やアメリカ人) へ興味や接近傾向だけでは説明しにくい。このことを踏まえ、国際的志向性は、統合的動機に代わるものとして、「英語」が象徴する、国際的な仕事への興味、国際社会へのかかわりを持とうとする傾向、外国人への態度などを包括的に捉えようとした概念である。その操作的定義 (国際的事象への関心、国際的職業への関心、異文化への開放的態度・接近傾向など) (Yashima, 2002; Yashima et al., 2004; Yashima, 2009a) を考慮し、本論では WTC との関連から、「世界の人に伝えたいことがあるという意識 (having things to communicate to the world)」を捉えるための項目群を採用する。

3. 国際ボランティア・プロジェクトの概要と分析の経緯

本研究が対象とするのは、NPO 国際教育交換協議会によって組織される「国際ボランティア・プロジェクト」への参加者である。世界の連盟に加入している各国の団体が相互に学生を派遣し同時に受け入れ国となり、世界全体では 17,000 人の若者が参加する。各キャンプでは、4～10 カ国からの参加者が 10～20 人、2～3 週間に渡り一緒に寝泊まりし協働する。プロジェクトの内容は、孤児院や老人ホームなどでのケアの仕事から、祭りの準備、道路や子供の遊び場の建設・修復まで多岐にわたる。本研究の主な対象となる 2007 年には、27 カ国に合計 659 人が派遣され、その 97% が大学生、75% が女子であった。プロジェクト別では建設、環境整備などの肉体労働系に 74.4%、ヒューマン・サービス系が 17.6%、文化・芸術系が 8% となっている。主催者によると、肉体労働系への参加が多いのは、要求される

言語能力が低いことと関係するという。参加者は現地までの交通費と場合によっては食費など現地でかかる費用も負担する。それにも関わらず、例年定員をはるかに越える応募がある。¹

同ボランティア・プロジェクト参加者を対象にした関連の研究では、外国語の習得や使用に関連する要因のほかに、異文化間能力と包括的に呼ばれる、態度や行動傾向の変化についての調査を行ってきた。これまでに、参加後の調査で、参加前と比べてエスノセントリズム傾向が低下していることや、自己効力感、社会的スキル、異文化への開放的態度などにおいて望ましい方向への変化が認められている (Yashima, 2009b)。

しかし、異文化接触において媒介となる言語が日本語でない場合、相手とコミュニケーションを積極的に進めるかどうかには、使用する言語（この場合英語）の能力や情意的な要因が関わるものと考えられる。本論では、すでにホームステイを経験した海外研修のリーダーが多いことも考慮し、以下の3点を研究目的とする。

4. リサーチクエスチョン

1. 国際ボランティア参加を決めた時点で、以前にホームステイ経験のある人と、ない人との間に、英語使用不安、英語で自発的にコミュニケーションを図る意思 (WTC)、伝える内容があるという意識に差があるか。
2. 国際ボランティア参加を通して、英語使用不安、WTC、伝える内容があるという意識の変化は見られるのか、また変化・不変化に以前のホームステイ経験の有無による違いはあるのか。
3. 国際ボランティア・プロジェクトに関連した英語使用能力は、英語使用不安、WTC や伝える内容があるという意識とどのように関係するか。また英語で伝える内容があるという意識と WTC はどのように関係するか。

5. 調査方法

5.1 参加者

参加者は2007年の夏に日本各地から国際ボランティア・プロジェクトに参加した人のうち、プロジェクトの前後で行われた質問紙調査において2回とも回答した大学生265名（女性210名、男性55名）である。そのうち138名は以前に海外ホームステイの経験があると答えている。さらに、プロジェクトに参加しなかった対照群として、当該プロジェクトに参加する人数が多い大学を含む関西地区の2つの大学に通う大学生109名（女性49名、男性60名）の協力を得た。

5.2 手順

プロジェクトに参加するために出発する前の6～7月に2007年度の参加者579名に質問紙を送付した。1回目の質問紙に回答した人に対し、2回目の質問紙を同じ年の10月に同じく郵送法で実施した（回答の返却は10～12月）。対照群への調査は英語の授業において、7月と12月の2回行い、（一部を除き）参加群と同じ内容の質問紙に回答するように協力を依頼した。対照群の中で2007年の夏休みにホームステイなどの海外プログラムに参加した6人は分析から除外した。調査対象者の内訳を分析の対象となる4グループに分けて表1に示す。

表 1 調査対象者の内訳

	国際ボランティア参加者	対照群（非参加者）
以前にホームステイ経験有り	138（女性：117, 男性：21）	24（女性：14, 男性：10）
以前にホームステイ経験なし	127（女性：93, 男性：34）	85（女性：35, 男性：50）
合計	265（女性：210, 男性：55）	109（女性：49, 男性：60）

5.3 質問項目

本調査で分析の対象としたのは以下の尺度と項目である。（ ）内に、今回の調査における、内的一貫性（Cronbach's α ）を示す。

〈参加者・非参加者，1回目2回目 共通項目〉

Willingness to communicate (WTC) (8項目, $\alpha = .90$) コミュニケーションをするかしないかは自由であるという想定で，8つの場面でどの程度自分が英語でコミュニケーションをするかを，「決して話さない」～「常に話す」の6段階で回答を求めるもの。Ryan (2009)に基づき，日本の状況に合わせて文言を変えて使用した。（例：大勢の前でスピーチをする機会があったとき / 列にならんでいて友達が前にいたとき / 英語の授業などのグループディスカッションのとき / はじめて会う人のグループで話す機会があるとき）

英語使用不安 (4項目, $\alpha = .84$) 英語を使うときに感じる不安の高さを表した文に，自分がどの程度あてはまるかを6件法で尋ねるもの。Ryan (2009)より以下の4項目を使用した。（1. 外国人に英語で道を聞かれると緊張する 2. 英語で話さないといけないとき，ドキドキする 3. ネーティブスピーカーと話すときには不安を感じる 4. 英語を話せる人が自分の英語を聞くと変に思うのではないかと心配する。）

伝える内容があるという意識 (6項目, $\alpha = .90$) 世界の人々と出会って話す機会があるときに，どの程度伝えたい内容をもっているかについての意識を問うもの (Yashima, 2009a 参照)。自分がどの程度あてはまるかを6件法で答える形式。（項目 1. 世界の人々と話したいことがある 2. 国際的な諸問題について特に意見はもっていない 3. 環境問題や南北問題などについて意見をもっている 4. 世界に向かって主張したいことがある 5. 世界の人々と話すとなると何を話してよいかわからない 6. 外国の友人と話したいことがたくさんある）。

〈参加者対象，2回目のみ〉

プロジェクトにおいて英語でどの程度伝達できたかについて，「聞く」「話す」を別々に「全く理解できない」～「ほぼすべて理解」，「全く話せない」～「ほぼ不自由なし」とそれぞれ10段階で評価するもの。²

6. 分析と結果

リサーチクエスチョン1 国際ボランティア参加を決めた時点で，以前にホームステイ経験のある人と，ない人との間に，言語使用不安，WTC，伝える内容があるという意識に差があるか。

プロジェクトへの参加を決定した段階で，以前にホームステイ経験のあるグループとないグループに差があるか，また性差があるかないかを見るため，各変数を従属変数とし，経験の有無と性別を独立変数として2 x 2のANOVAを行った。その結果，グループ差す

なわちホームステイの有無の主効果はすべての変数において有意であった (WTC: $F(1, 271)=21.70$, $p=.000$, $\eta^2=.07$; 不安: $F(1, 272)=23.28$, $p=.000$, $\eta^2=.05$; 伝える内容: $F(1, 272)=18.94$, $p=.000$, $\eta^2=.09$)。このことから国際ボランティア・プロジェクトへの参加を決めた時点で、以前にホームステイ経験のある人となない人との間に、言語使用不安、WTC、伝える内容があるという意識、において有意差が見られ、ホームステイ経験の方が、不安が低く、WTCと伝える内容があるという意識においては高かった。性差は伝える内容があるという意識においてのみ主効果が認められ、男子の方が少し高めであった。ホームステイ経験と性別の相互作用はなかった。

リサーチクエスチョン2 国際ボランティア参加を通して情意的な変化は見られるのか、また変化・不変化に以前のホームステイ経験の有無による違いはあるのか。

第1回目の質問紙の結果を予備的に分析したところ、すべての変数において、プロジェクトの参加者と対照群である非参加者の間に有意差があったため、その当初の差をコントロールして、参加の影響をみることのできる統計手法 (ANCOVA) が必要となることを確認した。WTCと伝える内容があるという意識の2変数については、ANCOVAの前提となる条件 (プロジェクト参加者と非参加者グループの linearity, homogeneity of regression slopes) が確認されたので、ANCOVAを実施した (表2)。この際、ポストテストにおける、各変数の項目の平均値を従属変数とし、それぞれの変数のプリテストでの項目の平均値を共変量とした上で、ボランティア・プロジェクトへの参加 (参加・非参加)、以前のホームステイ経験 (有り・なし) を独立変数とした。その結果を表2～3に示す。ボランティア・プロジェクトへの参加 (参加・非参加)、以前のホームステイ経験 (有り・なし) の組み合わせにより4つのグループができるので (図1参照)、それぞれの変化・不変化の状況を視覚的に表したのが図1～2である。

表2のANCOVAの結果が示すように、WTCにおいては、1回目の時点での差をコントロールしても、さらにプロジェクト参加 (参加・非参加) の影響は有意で、その影響が認められた。一方以前のホームステイ経験は、1回目の時点の差をコントロールすると、その影響は有意でない。すなわち以前にホームステイがあった人となかった人でWTCの伸び率に差はなかったということになる。³

図1では、1) 国際ボランティア・プロジェクト (IV) 参加・ホームステイ (HS) 経験有り、2) IV参加・HS経験なし、3) IV非参加・HS経験有り、4) IV非参加・HS経験なし、の4グループの変化や不変化の状況を示している。1回目 (プロジェクト前) の段階で、IVプロジェクト参加者も、非参加者も、以前のホームステイ (HS) 経験のある2つのグループにおいて (上記1) と3)), WTCが最も高い。それに続いて、少し低めで、今回のIV参加者で以前にホームステイ経験のない人 (上記2)) が続く。かなり下に今回IVに参加せず、これまでもホームステイ経験のない人 (上記4)) が位置している。一方、2回目 (プロジェクト後) の調査では、今回プロジェクトに参加したグループ1) と2) はほんのわずかながら上昇気味であるのに対し、以前ホームステイ経験はあるが、今回のIVには参加しなかったグループ3) はWTCが低下している。

表2 ANCOVA：英語で自発的にコミュニケーションを図る意思（WTC）の変化

要因	自由度	平均平方	F 値	有意確率	偏 η^2
共変量（WTC 1 回目）	1	1712.00	292.85	.000	.45
プロジェクト参加	1	463.93	18.55	.000	.05
以前のホームステイ経験	1	50.24	2.01	.157	.00
グループ x ホームステイ経験	1	1.72	.07	.793	.00

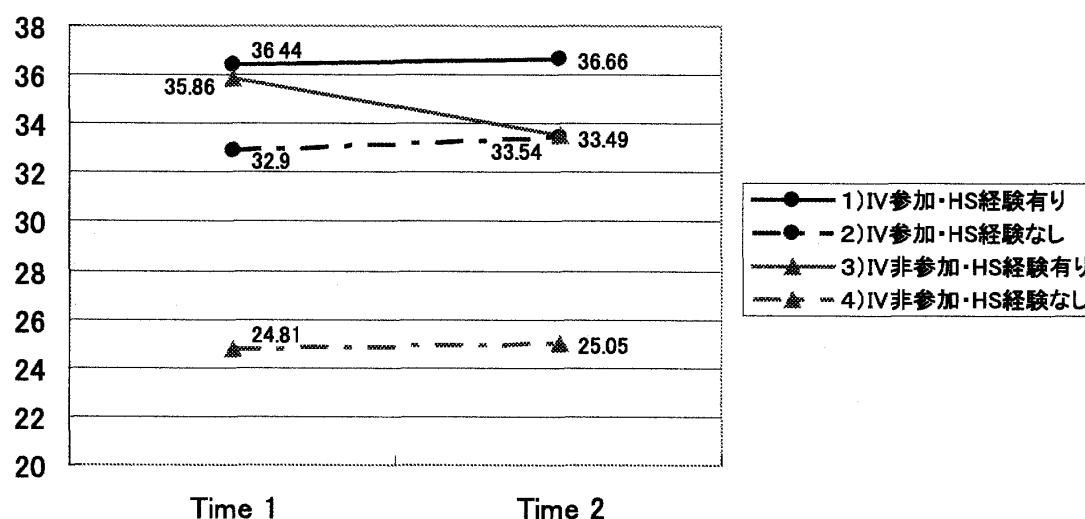
 $R^2 = .61$ 

図1 英語で自発的にコミュニケーションを図る意思（WTC）の変化

注：IV 国際ボランティア HS ホームステイ

次に「伝える内容があるという意識」では、ボランティア・プロジェクト参加の影響がより明確である。表3に示すように、1回目の差をコントロールしても、プロジェクト参加の影響は有意で、参加の効果が認められる。以前のホームステイ経験の有無によって、今回の参加による影響に差は認められない。図2では、ボランティアプロジェクト（IV）に参加したグループ1）、2）が、参加後に、参加前と比べて伝える内容があるという意識が高くなっているのに対し、IVに参加しなかったグループ3）4）は、変化がほとんど見られない様子が示されている。IVに参加したなかで、以前のホームステイ経験が有るグループとないグループを比較すると、以前にHS経験なしのグループのほうが勾配がやや急で、はじめての参加のインパクトが大きいことがうかがえる。この意味でプロジェクト参加の効果は、以前にHS経験のない2つのグループ2）と4）を比較するとより明確になる。

表3 ANCOVA：伝える内容があるという意識の変化

要因	自由度	平均平方	F 値	有意確率	偏 η^2
共変量（伝える内容がある 1 回目）	1	125.74	345.50	.000	.49
プロジェクト参加	1	10.31	28.32	.000	.07
以前のホームステイ経験	1	.47	1.29	.257	.00
グループ x ホームステイ経験	1	.09	.24	.624	.00

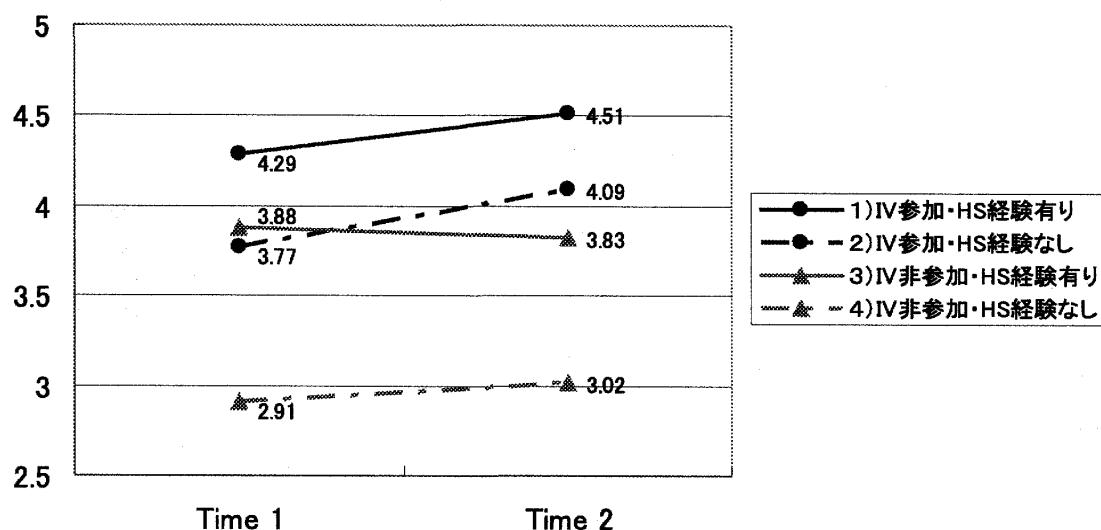
 $R^2 = .65$ 

図2 伝える内容があるという意識の変化

注：IV 国際ボランティア HS ホームステイ

英語使用不安については、前述の ANCOVA の前提となる条件が認められなかったため、対照群との比較をやめ、参加したグループに 1 回目と 2 回目で変化があるかどうかを見るため、繰り返しの混合モデル分散分析を行った。従属変数はプレテスト、ポストテストにおける外国語不安の項目平均値、独立変数は、Time（プレテスト、ポストテスト）と以前のホームステイの有無の 2 要因である。分析の結果は表 4、プロジェクトの参加前後でどのように変化するかを示したのが図 3 である。Time（プレテスト、ポストテスト）による変化が有意であったが、以前のホームステイ体験との相互作用の主効果は有意でなく、以前の経験が変化の度合いに影響がないことを示している。しかし、全体の不安レベルは、以前にホームステイ経験のあるグループの方が、ないグループより有意に低いことが、between group の比較で明らかになっている。そのグループの差は図 3 に示している。この図ではホームステイ経験が有るグループもないグループも、プロジェクト参加により、不安が低下している様子が表れている。

表4 ANOVA：繰り返しのある混合モデル

要因	自由度	平均平方	F 値	有意確率	偏 η^2
<Within group>					
Time	1	15.25	33.97	.000	.11
Time x ホームステイ経験	1	1.21	2.69	.102	.01
誤差	263	.449			
<Between group>					
以前のホームステイ経験	1	54.30	21.80	.000	.08
誤差	263	2.49			

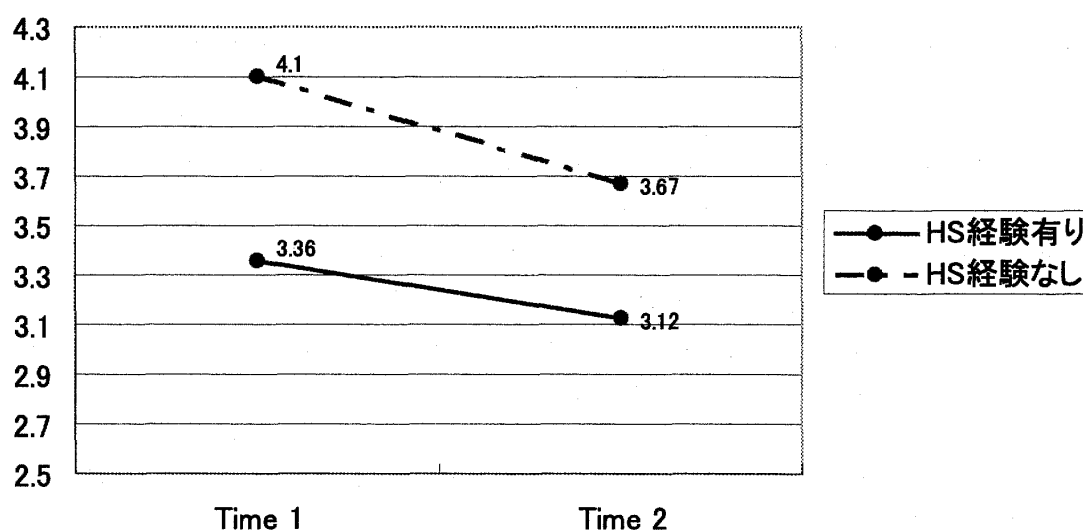


図3 英語使用不安の変化

リサーチクエスト3 国際ボランティア・プロジェクトに関連した英語使用能力は、言語使用不安、WTC、伝える内容があるという意識とどのように関係するか。

2回目の調査における言語使用不安、WTC、伝える内容があるという意識とプロジェクトに関連した英語運用能力自己評価との間には表5のような相関がみられた。ボランティア・プロジェクトに参加するなかで自己評価した「聞く」「話す」能力と英語を使うときの不安は負の相関、WTCとは正の相関が認められた。伝える内容があるという意識は「聞く」よりも「話す」能力のほうが相関が高い傾向にある。英語使用不安とWTCの負の相関はこれまでの研究を支持する結果である。また、伝える内容があるという意識とWTCの相関はかなり高くなっている。

表 5 英語使用不安, WTC, 伝える内容があるという意識と
プロジェクトに関連した英語運用能力自己評価の相関

	英語使用不安	WTC	伝える内容があるという意識
聞く能力	-.40**	.34**	.18**
話す能力	-.43**	.43**	.34**
英語使用不安		-.42**	-.36**
WTC			.51**

** $p < .01$ * $p < .05$

7. 考察

本研究においては、最近若者の間で関心が高まっている短期の国際ボランティア活動への参加により、英語使用にかかわる情意的側面がどのように変化するかを、以前のホームステイ体験との関係に注目して分析した。まず参加前の時点で、参加者のなかでこれまでにホームステイ経験があると答えたグループのほうが、英語を使う不安が低く、英語を話したいという意思が強いこと、また、世界の人々と話す内容があると認識していることがあきらかとなった。これが1回目のスタディ・アブロードの結果なのか、以前に参加を決めた段階ですでに差があったかどうかはこの研究では明らかにできないが、次に示すリサーチクエスチョン2の結果から、両方の相乗効果でないかと推察できる。

研究課題2の結果に示すように、ボランティアに参加した人たちは、以前にホームステイ経験のあるグループもないグループも英語使用不安が低下する傾向が認められた。以前にホームステイ経験のある人となない人には、当初から不安の感じ方に大きな差が見られたが、このことも関係し、平均値の変化を見ると、今回はじめて異文化接触をする人のほうが変化の度合いがやや大きめである。しかし、リピーターもさらに英語を使うことに対する不安を軽減させていることから、重ねて異文化接触を経験することの効果もあることが示されている。

また、WTCについても、以前にホームステイ経験のある人は、ない人よりWTCがかなり高く、以前の経験はないが今回プロジェクトに参加を決めた人も、どちらにも参加しなかった人と比べるとかなり高くなっている。一方、プロジェクト参加による影響が認められたものの変化の度合いは小さい。以前にホームステイ経験はあるが、今回はプロジェクトに参加しなかった人が、英語で話す意思(WTC)を2回目に低下させているが、これは日本での英語学習に対するリアクションであるとも考えられる。このグループの人数が少ないため分析が安定しなかったという可能性もあるので、即断はできないが、さらに調べる意義はある。WTCは不安や自信などの影響を受けることが先行研究で報告されており、プロジェクト参加により英語を使う不安が低下し、自信が高まれば、WTCも高まることが予想されたが、あまり変化は見られなかった。また、今後測度の検討をしたうえで再調査を行うことが必要と考えられる。⁴

世界に向かって伝えたいことがあるという意識については、参加を決めたグループが参加をしないグループより、プロジェクト参加前から高い傾向にある。さらに、この人たちは参加した結果その傾向が強まっている。この結果には、国際ボランティア・プロジェクト参加を希望する人の特性が表れていると同時に、参加することで、様々な国の人々とのコミュニケーションを実際に経験したことから、具体的に話したい事柄を意識する傾向が高まったと考えられる。一方以前にホームステイをした経験はあるが今回参加しなかった

人たちは、この傾向は横ばいないしは下がり気味である。

全体として、以前にホームステイ経験のなかった人のほうが、プロジェクト参加による変化が大きい傾向が見られ、はじめての異文化接触経験のインパクトが大きい傾向は読み取れる。また、リピーターは、さらに良い方向への変化を示し、繰り返し異文化接触を行うことが英語の情意的側面によい効果をもたらすことが確認できた。一方、以前にスタディ・アブロードの経験がなく、今回も参加しなかった人は、ずっと低いレベルのまま無変化である様子が表されている。

研究課題3においては、相関分析により、自己評価の英語運用能力の高い人の方が、英語を使う不安が低く、英語で伝えたいという気持ちが強いこと、また世界の人に向かって伝える内容のある人のほうが、英語で伝えたいという気持ちが強いことが確認された。Yashima & Zenuk-Nishide (2008) は、伝える道具としての英語の知識を身につけることと、英語で伝える意思、伝える内容を、別々に考えるのではなく、それらが相互に関係し相乗効果が高まるというモデルを提示し、コンテンツ・ベースの英語活動の意義を唱えている。人は、伝える相手があり、伝える内容があるときに、伝えたいと思うこと、そして、心から伝えたいと思ったとき、伝えるための道具が必要と感じ、学習動機が高まることを提案したモデルである。今回の調査結果はこの考え方を支持するものとなっている。

8. おわりに

今回の調査では、国際ボランティア活動参加の効果として、すでに分析を終えた異文化対応力の側面、すなわちエスノセントリズム傾向の低下、国際的関心の高まり、異文化への開放的態度の強まりに加えて、より英語学習に関連の深い、英語使用に関わる不安やコミュニケーション関連要因においても変化が確認できた。

国際ボランティア活動参加者の約半数がすでにホームステイの経験があることから、異文化接触経験を持つ人はそれを繰り返し求める傾向があることが伺える。これまでの調査結果より、参加の理由の中で、「自己改革」「新たな自分の発見」と分類できるものが多く、若者が、プロジェクトへの参加をさらなる飛躍の機会と捉えていることが伺える。また、ボランティア活動だけでも十分意義はあることなのに、なぜ「国際」ボランティアなのかというところから、英語を使って、少し国際的になりたいという若者の気持ちがうかがえる。なりたい自分、すなわち「理想の自己」が国際的であるためには、英語を使えるということが重要である。英語を使って世界の若者と協働することで、自らの自己イメージの向上を図りたい若者の心理が垣間見られた。このように自己改革をめざしたボランティア活動への参加の結果、個人的に得るものも大きい反面、活動における意思決定や、議論への参加において、ヨーロッパからの参加者に押されがちであることが、面接などで語られた。「もっと英語を勉強してから再度参加したい」と「リベンジ」誓う学生もいた。労働面では誠意をもって十全な貢献をする日本の若者が、議論への参加や意思決定などの側面で、よりいっそう積極的な参加を可能にするために、また彼らの「声」を世界に聞こえるものにするために、英語力の向上に加えて、英語使用不安の軽減や英語を使う意思・英語で伝える内容の涵養などを考えていく必要がある。この意味で、日本の若者のエンパワーメントに英語教育の果たす役割は大きい。

謝辞：本研究に対する調査参加者の皆様と、国際教育交換協議会のご協力に心より感謝いたします。また貴重なご意見をいただきました査読委員の先生方に御礼申し上げます。

注

1. 国際教育交換協議会が発行する報告書、各種資料、スタッフの談話、オリエンテーションの内容を参考にした。
2. 英語標準テスト等を実施することが望ましいが、日本の各地から集まり、世界各地で活動を行う参加者に、統一した試験を実施することは不可能であったため、本研究では自己評価を採用した。自己評価は、英語使用の自信を反映することが指摘されている。TOEFL など点数の自己申告も依頼したが、対象人数がかなり少なくなるため今回は使用をみあわせた。
3. 両変数において誤差分散の等質性 (Leven's test of equality of error variances) が確認できなかったので有意水準を厳しくすることで処理した。(Pallant, 2001 参照)
4. McRoskey (1992) のオリジナルの WTC スケールを基礎にした WTC 測度は、信頼性、妥当性が高く、発話量やコミュニケーションの頻度などの予測力がある反面、もともと性格特性に準ずる指標として開発されたために、安定し変化しにくいことが指摘されている (Yashima & Zenuk-Nishide, 2008)。

引用文献

- Clément, R. (1986). Second language proficiency and acculturation: An investigation of the effects of language status and individual characteristics. *Journal of Language and Social Psychology*, 5, 271–290.
- Clément, R., Gardner, R.C., & Smythe, P.C. (1977). Inter-ethnic contact: Attitudinal consequences. *Canadian Journal of Behavioral Science*, 9, 205–215.
- Collentine, J. (2004). The effects of learning contexts on morphosyntactic and lexical development. *Studies in Second Language Acquisition*, 26, 227–248.
- Collentine, J. & Freed, B. F. (2004). Learning context and its effects on second language acquisition: Introduction. *Studies in Second Language Acquisition*, 26, 153–171.
- Desrochers, A. & Gardner, R. C. (1981). Second language acquisition: An investigation of a bicultural excursion experience. Quebec: International Center for Research on Bilingualism, Laval University.
- Dewey, D. P. (2004). A comparison of reading development by learners of Japanese in intensive domestic immersion and study abroad contexts. *Studies in Second Language Acquisition*, 26, 303–327.
- Dufon, M. A. & Churchill, E. (Eds.), (2006). *Language learners in study abroad contexts*. Clevedon, England: Multilingual Matters.
- Freed, B. F. (1995). What makes us think that students who study abroad become fluent? In Freed, B. F. (Ed.), *Second language acquisition in a study abroad context*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 123–148.
- Freed, B. F., Segalowitz, N., & Dewey, D. P. (2004). Context of learning and second language fluency in French: Comparing regular classroom, study abroad, and intensive domestic immersion programs. *Studies in Second Language Acquisition* 26, 275–301.
- Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold.
- Horwitz, E. K. (2001). Language anxiety and achievement. *Annual Review of Applied Linguistics*, 21, 112–126.

- Lafford, B. A. (1995). Getting into, through, and out of a survival situation: A comparison of communicative strategies used by students studying Spanish abroad and 'at home'. In Freed, B. F. (Ed.), *Second language acquisition in a study abroad context*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 97–121.
- Lafford, B. A. (2004). The effect of the context of learning on the use of communication strategies by learners of Spanish as a second language. *Studies in Second Language Acquisition* 26, 201–225.
- MacIntyre, P. D. (1999). Language anxiety: A review of the research for language teachers. in D. J. Young, (Ed.) *Affect in foreign language and second language learning*. Boston: McGraw-Hill.
- MacIntyre, P. D. & Gardner, R. C. (1994). The subtle effects of language anxiety on cognitive processing in the second language. *Language Learning*, 44, 283–305.
- MacIntyre, P. D., Clément, R., Dörnyei, Z., & Noels, K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *Modern Language Journal*, 82, 545–562.
- McCroskey, J. C. (1992). Reliability and validity of the willingness to communicate scale. *Communication Quarterly* 40, 16–25.
- Pallant, J. (2001). *SPSS survival manual*. Philadelphia, PA: Open University Press.
- Ryan, S. (2009). Self and identity in L2 motivation in Japan: The ideal L2 self and Japanese learners of English. In Dörnyei, Z. & Ushioda, E. (Eds.) (2009). *Motivation, language identity and the L2 self*. (pp.120–143.). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- 酒井英樹・小池浩子 (2008) 日本語話者大学生の英語学習動機の変化—国際イベントのボランティア参加の効果 *JALT Journal*, 30, 51–68.
- Sasaki, M. (2004). A multiple-data analysis of the 3.5-year development of EFL student writers. *Language Learning*, 54, 525–582.
- Sasaki, M. (2007). Effects of study-abroad experiences on EFL writers: A multiple-data analysis. *Modern Language Journal* 91, 602–620.
- Segalowitz, N. & Freed, B. F., (2004). Context, contact, and cognition in oral fluency acquisition. *Studies in Second Language Acquisition* 26, 173–199.
- Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *Modern Language Journal*, 86, 54–66.
- Yashima, T. (2009a). International Posture and the Ideal L2 Self in the Japanese EFL Context. In Dörnyei, Z. & Ushioda, E. (Eds.) *Motivation, language identity and the L2 self*. (pp. 144–163). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Yashima, T. (2009b). *The impact of participation in international work projects on L2 learning motivation, WTC and international posture: Development of the possible L2 self*. The AAAL 2009 Conference. Denver, Colorado
- Yashima, T., & Viswat. L. (1997). Acquisition of “fluency in L2” through overseas study program, *JACET Bulletin*, 28, 193–206.
- Yashima, T. & Zenuk-Nishide, L. (2008). The impact of learning context on proficiency, attitudes, and L2 communication: Creating an imagined international society. *System*, 36, 566–585.
- Yashima, T., Zenuk-Nishide, L., & Shimizu, K. (2004). Influence of attitudes and affect on willingness to communicate and L2 communication. *Language Learning* 54, 119–152.